

## who の先行詞は me か thou か

—ジョン・ダンの“A Valediction: Forbidding Mourning”の2つの訳について—

高 橋 正 平

### 序

本論はジョン・ダンの詩に関する疑問点を解消することを目的とするものである。ダンと言えば17世紀初頭のいわゆる形而上詩人を代表する詩人であるが、彼の“A Valediction: Forbidding Mourning”「別れ：嘆くのを禁じて」（以下「別れ」と略記する）はそのコンパスイメー使用によってエリオット激賞の形而上詩を代表する詩である。愛する「女性」に向かって旅立つ「男性」が嘆いてはいけないことを立証する詩である。この詩についていささか旧聞に属するが、『英語青年』（2001年8月号）に以下の投稿が東苑忠俊氏からあった。投稿文は長いので全文を紹介したい。

### ジョン・ダンの詩に2つの訳

コンパスの比喩で知られる形而上詩人 John Donne(1577-1631) の詩“A Valediction: Forbidding Mourning”は9連36行から来ていますが、その中の who の先行詞のとり方の違いから、市販の本に2通りの訳があることに気付きました。まず、コンパスの登場する最後の第7～9連 (stanzas) を掲げます。

- 7 If they be two, they are two so  
 As stiff twin compasses are two  
 Thy soul the fixt foot, makes no show  
 To move, but doth, if th'other do.

- 8 And though it in the centre sit,  
 Yet when the other far doth roam,  
 It leans and hearkens after it,  
 And grows erect, as that comes home.
- 9 Such wilt thou be to me, who must  
 Like th'other foot obliquely run;  
 Thy firmness makes my circle just,  
 And makes me end where I begun.

問題の箇所というのは、この第9連の Such wilt thou be to me, who must / Like th'other foot obliquely run の中の who の先行詞を me とするもの(A)と、thou とするもの(B)とがあるため、当然意味も違っている点です。

(A)の側は『英語青年』1963年6月号の「英詩集註研究」に見られます。これは原文(古いスベリング)とその訳文(石井正之助訳)、さらに5氏による各自の注釈(石井正之助、川崎寿彦、松浦嘉一、御輿員三、佐山英太郎)が掲載されています。(中略)

この第9連の訳は、

きみは私にとってそのようなもの、/他の脚のように斜めになって走る私に、 / きみの変わらぬ堅固さが私の円を正しく描かせ / 初めの点に立ち帰らせる。

としてあって、斜めに走るのは「私」です。先行詞を me とする点は、湯浅信之編『ジョン・ダン詩集』(岩波文庫、1995年1月)でも同じで、こちらの訳は「どうかこの姿勢を守ってくれ。僕は、もう一つの脚のように、斜めに走る」と、斜めに走るのは同じく「僕」としてあります。

これに対して、(B)の例の深瀬基寛編『英詩鑑賞』(創元社、昭和44年7月)では、この部分の who の先行詞を thou としてあって、こちらの訳では、からだが斜めにして走らねばならぬのは「あなた」とされています。

あなたも、それと同じこと。あなたも、もう一方と同じように、からだをななめにして走らなければならないのだ。

そこで、次の3つの疑問をもちました。(1)問題の先行詞は(A)の通り me ととるべきであるように思えるが、果たしてそうか。(2)もしそうであれば、『英詩鑑賞』の執筆者(18人)の中には『英語青年』の5氏の中の御輿氏も加わっているのに、なぜこうした解釈の違いが生じたのか(御輿氏はこの詩を担当しなかったからなのか、もしくは何か理由があつてのことなのか)。(3)以上の点を指摘、もしくは論じたものがこれまでに発表されているのであろうか。

深瀬氏と言えば「知られざる思想家」とも言われ、その逝去に際して『英語青年』(1966年11月)は「追悼：深瀬基寛氏を偲ぶ」を特集(その8氏の中には前記18氏の中の2氏の名も見える)したほどの方であるだけに、翻訳を業とする者としては、以上の訳の違いが気になるところです。(東苑忠俊)<sup>1</sup>

東苑氏の言わんとするところは小論のタイトルにもあげたように、9連33行の who の先行詞を me にするか thou にするか解釈が分かれているということである。以下小論においてこの問題点を考えていきたい。関係代名詞 who の先行詞は me なのか thou なのか、先行詞を me とするか thou とするかで詩全体は解釈上どのような違いが生じてくるのか、これらを中心にして論を進めていきたい。

## 1. 「別れ」について

東苑氏が投げかけた問題点を論ずる前に、最初「別れ」を詳細に読んでみよう。この詩はダンの詩の中でもまた形而上詩のなかでも代表的な詩と見なされている。Walton によれば「別れ」はギリシア、ローマの詩人も及ばない名詩であり、Coleridge はダン以外の詩人には書けないとコンパスイメーを激賞した。20世紀では T.S.Eliot がやはり感受性の統一という視点から激賞したことは記憶に

新しい。逆に Dr. Johnson はコンパスイメージを馬鹿げているのか独創的と言うべきか疑問であると評した。「別れ」については同時代人からのコメントはなぐただ Walton がこの詩は1611年にダンが大陸に行く際に妻の Ann にあてて書いたとそのダンの伝記で書いたのが唯一のコメントである。Walton の伝記には様々な問題があり、Walton の言葉をそのまま信じることにはいささかためらいを覚える。Walton 伝記の信憑性はさておき、「別れ」が賞賛される理由はその論理的な詩の構成及び斬新なイメージやコンシートの使用、天文学や錬金術の豊富な知識にあると言える。この詩は愛する女性との別れの詩である。しかし男性は何とかして女性をなぐさめようとする。彼によれば二人の「別れ」は「別れ」ではない。詩のおもしろさは実際の男女の「別れ」は「別れ」ではないことを証明する詩人のロジックにある。類推から議論によって立証する詩の展開である。1-3連まで立証は二人の別れは「穏やかで」「静かで」あることであり、普通の恋人に見られる「涙」や「ため息」はない。二人の愛は俗人の愛とは異なり、精神的な宗教的な愛にも匹敵する愛である。「僕達の愛を、素人に打ち明けるのは、/ 僕達の喜びを、冒瀆するものである」という行には素人 (layetie)、冒瀆 (prophanation) が使用されているが、これらの語には当然のことながら宗教的な意味が含まれている。二人の愛は俗人を越えた聖なるものと見なし、俗人の「涙」や「ため息」にあふれる別れの次元を越えているのである。次に二人の男女は天体にたとえられる。彼らはすべてが死す地上を越えたところにいる。予測も出来ない破壊的な自然災害と異なり、天体の動きは平和で穏やかである。二人の別れはお互いに何も危害はもたらさない。それに反し俗人の別れは、お互いに精神的にも肉体的も激しい痛手を残す。「愚かな月下の世界の恋人たちの愛は、/(感覚こそその魂であるので)別離を/認めることはできない。何故ならば / 別れが愛を構成する要素を奪うから」である。俗人の愛は感覚がすべてである。それに反し二人は「愛の力によって純化されて」いるので、俗人の恋人とは異なり「目や、唇や、手はなくても困らない」のである。ここまで男女の愛は俗的な愛とは異なり、俗界を越えた人たちの愛であることが描かれる。ダンは

俗的な愛とは違った高尚な愛の姿を読者に提示する。二人の愛は世間的な愛とは全く関係ないのである。5 連までは俗人の愛と聖人の愛の違いについて述べているが、「別れ」が英詩においてその最も忘れがたいイメージを駆使した連が 6 連から続く。ダンの恋愛詩を最も特徴づける愛し合う男女の魂は一つであるという考えが導入される。男女の魂は一つになっているので、男性が女性のもとを離れても二人は「引き裂かれ」はしない。ただ二人の魂は「薄く延ばした金箔」のように広がっていただけなのである。これは一種のこじつけ、詭弁である。詩人は愛し合う男女の別れは別れではないということを様々なこじつけ、詭弁によって実証するのである。一見したところでは何も関連性がないように見える二つのもののなかに関連性を見いだすのはいわゆる「コンシート」であるが、ここではその典型的なコンシートの使用である。6 連は二人の魂は一つであると言っているが、7 連では二人の魂が二つの場合を仮定する。その場合にダンが使うのが有名な「コンパス」イメージである。二人の魂が二つであってもそれはコンパスの二本の脚のようなのである。女性は固定した脚で、男性はもう一方の円を描く脚である。最終連の 9 連までは「コンパス」イメージが続く。女性の脚は中心に座った状態であるが、男性の脚が遠くに行けば、女性の脚も男性を心配して男性の方に傾く。しかし、男性が円を描いて戻ってくれば女性は直立する。最終連は問題の箇所であるが、湯浅信之氏の訳は以下の通りである。

どうかこの姿勢を守ってくれ。僕は  
 もう一つの脚のように、斜めに走る。  
 君が不動であるなら、僕の描く円は  
 正しく閉じて、僕は原点に立ち返る。<sup>2</sup>

「斜めに走る」という訳は *obliquely* の直訳であるが、「斜め」では意味をなさない。この意味は A.J. Smith が解釈するように “deviating from the strict course”<sup>3</sup> ではなく、Redpath の “the describing arm follows a curved path, not a straight

line”<sup>4</sup>を意味していると考えられよう。最終連では旅に出る男性が家に残る女性に対して浮気はすると言っているのである。家に留まる女性が操を固く守れば男性も旅先で浮気することなくきちんと家に帰ってくる。しかも円を描いて帰ってくるのである。「斜め」では円を描かない。円は言うまでもなく「完成」の象徴である。男性と女性との別れに際して、詩人が言いたいことは二人の別れは別れではないと女性を説得することである。そのために詩人は彼独特の手法を詩で使う。その一つは類推(analogy)である。例えばダンと愛する女性→天体→コンパスの両脚、結婚指輪→天体の軌道→錬金術の黄金の象徴→コンパスによって描かれる軌道、普通の人たちの感情→地震や嵐、と言った具合に次から次へと類推が変化していく。あるいはイメージの展開についても、例えば円は結婚指輪、惑星の軌道、錬金術での黄金の象徴(中央に点のついた円で表された)、コンパスによって描かれる軌道で象徴的に表される。ダンはストレートに感情を表しはしない。むしろ感情は類推、コンシートに基づくロジックによって抑制される。まさしく「うまく作られた壺」である。

次に詩の構成を見てみよう。1-2連では男性と女性は徳のある人と対比されている。徳のある人が死に際して泣くことがないように、二人も泣くべきではない。二人には肉体的な別れを克服する精神的な一体感がある。だから二人は俗人の別れのように泣いたり、ため息をついたりはしないのである。二人の愛は俗人の愛を越えた聖なる、高尚な愛である。

第3連でダンは地震とプトレマイオス天文学の天球の動きとの対比を持ち出す。この意味するところは地震と天球の動きが地上の人間にもたらす様々な影響である。地上の地震は文字通り害を引き起こし人々に恐怖をもたらす。ところが天球の動きは地震よりもはるかに規模の大きな揺れであるにもかかわらず、人々には何も危害はない。この連は第4連によって意味が明らかになってくる。この世の(詩では「sublunary」(月の下の)である)普通の恋人たちは「月の下」にいるから死や変化を受け、いわば肉体を基にして結びついている。彼らの愛は五感によっているので、別れに耐えることは出来ない。ところが男性と女性の

別れは別れに際して何も変化はない。二人の愛には肉体的要素はなく、二人はもっぱら精神的に一体となっているからである。ここで地震と天球の揺れと二組の愛が対比される。「月の下の」普通の恋人たちの別れは地震に相当する。地震が危害をもたらすのと同様、俗人の別れも二人には危害をもたらす。しかし詩人と恋人の別れは俗人の別れとは異なる。二人は感情に左右されたり、嘆いたりすべきではない。二人の愛は「月の下の」恋人たちを遙かに超える次元にある愛で、それは丁度天球の揺れのようなものである。天球の動きによって危害を受けた者がいるであろうか。二人の愛はまさに天球の揺れに相当する愛である。二人が別れても二人には何ら危害はない。ダンはこのように類推によって詩を進める。第5連で二人の愛は精神的な完全性を表すと述べているが、二人の愛は「純化」されている。つまり俗人の肉体的な愛を凌駕する愛である。二人の愛が天球の愛にたとえられる理由はここにある。天球の動きが誰にも害をもたらすことがないのと同じように、詩人と女性の別れも互いに危害を与えることはないし、別れに際し、何ら恐れを抱いてはいけくないのである。ここまでのダンの詩の展開を整理すると以下ようになる。

#### 普通の恋人たち愛→地震

#### ダンと恋人の愛→天球の揺れ

6連では前の連の二人の愛の純化、二人の魂の一体感を受けて、それをさらに展開する。二人の魂は一体化しているので、別れることがあっても二人に別れは存在しない。魂が一つになっているので、別れてもそれは引き延ばされるだけで、金箔のようにどこまでも延びていく。引き延びていく魂が薄く引き延ばされた金箔にたとえられる。これはダン特有の「コンシート」である。金はまたあらゆる物質の中で最も美しく、価値があり、また非金属を含まないが故に、ダンと恋人の愛の姿を表すのに最適な語となるのである。「別れ」の最後のコンシートは7～9連までのコンパスの使用である。ダン二人の愛は魂において一体化していると言ったが、二人の魂が二つであるならばそれは二つである特別な意味で二つであると言う。ダン二人の魂をコンパスの二つの脚にたとえ

る。二つの脚はコンパスの上で一つになっている。コンパスの二つの脚は二人の魂を表す。二人の魂はコンパスの脚が離れたり、一緒になったりするように、離れたり一緒になったりする。ダンはこのコンパスの固定した脚を恋人にたとえ、もう一方の動く脚を自分自身にたとえる。そしてダンは、コンパスの脚がしっかりと固定していれば、他方の脚もさまようことなくきちんと円を描いて元に戻って来ると言う。ちょうどコンパスの固定した脚が円の中心であるように、恋人は二人の愛の中心である。ダンのレトリックは巧妙である。次から次へとコンシート、類推、対比を続け、読者を戸惑わせる。ダンの詩はあくまでもロジックによって進行する。この詩の場合も徳のある人の死、天球の動き、金箔、コンパスの脚がダンと恋人に対比され、その論理的な説明から別れに際して恋人を有無を言わせないほど納得させる。二人の場合、「別れは別れでない」のである。魂が一体化した二人にとって別れはありえないのである。

これまで「別れ」を詳細に検証してきた。この詩の面白さは、別れを告げる語り手が女性にむかって、二人の別れは俗人の別れとは違い、別れではないことを立証、説得する点にある。愛し合う二人の愛は現世を越えた、俗人の愛とは全く次元の異なる愛である。二人の真に愛し合うの魂は一体化しており、別れに際して二人が引き裂かれることはありえない。「別れ」のなかでダンは様々な技巧を駆使し、相手の女性そして読者に戸惑いを与えるが、最終的に二人の別れは別れではないことを相手の女性そして読者に立証するのである。これまでの詩の理解をふまえて、次に本論の論点に移っていきたい。

## 2. who の先行詞は thou か me か

問題は 9 連 33-4 行の "Such wilt thou be to me, who must / Like th'other foot obliquely run;" である。ここでの Such は前のスタンザを受けている。コンパスの中心となる脚がしっかりとしていれば他方の脚は遠く離れていてもきちんと円を描いて元に戻ってくる。君は私にとってコンパスの中心の脚のようで



いてほしい、と詩人は語る。問題は who 以下である。who の先行詞は thou か me か。実は thou か me のいずれを先行詞とするかによってこの詩の意味は全く異ってくる。それは旅に行くのが男性か女性かという問題を提起するのである。筆者はこれまで「男性」が「女性」にあててこの詩を書いたとの前提で論を進めてきたが、問題はそう簡単にはいかない。『唄とソネット』のなかでは詩の語り手が男性か女性かはっきりとわかるのが多く、ほとんどの詩は語り手が男性である。ただ「夜明け」「制限された愛」「自愛」だけは女性が語り手である。その他は詩の中に語り手が男性であることが判明する語句が出てくるので、読者は語り手について迷うことはない。ところが「別れ」に関しては、語り手が男性か女性かを断定する語句は詩には出てこない。『唄とソネット』の詩のほとんどが男性だから「別れ」の語り手も男性だと決めつけることは出来るだろうか。また Walton は、「別れ」はダンがフランスへ行く際に妻 Ann にあてて書いたと言っており、これによって欧米の研究者はほとんどすべてが「別れ」の語り手は男性(ダン)で語られている人は女性(妻 Ann)と解釈している。しかし、Walton の伝記には様々な問題点があって、信憑性を欠いているという批評もあり、そのまま彼の言うとおりに信じていいものか判断しにくい。伝記的事実を詩に持ち込むことは詩の解釈には都合がいいが、正確な事実関係を調べることは不可能である。「別れ」の語り手は大体男性であろうと想像できるが、確証はない。ただ 8 連の *grows erect* の *erect* に性的な意味を取れば、コンパスの中心にいるのは男性ということになる。性的なニュアンスはその前の *goe* とか *melt* にもあるが、*goe* は「性的なクライマックスを体験する」、*melt* は「オルガスムを体験する」という意味を持っている<sup>5</sup>。語り手を女性とするとそのような性的な言葉を自由に発言する女性を容認することになるが、ダンの詩を見てもそのような現代風のフェミニストは登場しない。フェミニスト的解釈はまさしく現代に「誘拐」していることになる<sup>5</sup>。ダンの恋愛詩の場合どちらかと言えば、男性に従順な女性が登場することが多い。だからといって、「別れ」の語り手が女性ではないとは言えないのであるが。「別れ」に関しては、語り手が男性、女性、いず

れかに決定できる確証はない。もし語り手を女性とすると、旅かどうかは判断しかねるが、愛する男性をにおいて出掛けるのは女性で、家で彼女の帰りを待つのは男性ということになる。家に残る男性が浮気をしなければ、外に出掛けた女性も不貞を働かずに男性のもとへ帰ってくるということになる。これに反し、語り手を男性とするととりわけ解釈に不都合は生じない。ダンがフランスに行く際に実際に妻にあてて書いた詩であろうがなかろうが、愛する女性への男性の優しい気持ちを読みとるのは自然なことである。それにしても語り手が男性である証拠はない。「別れ」の詩の解釈について who の先行詞が thou か me かで詩の解釈は異なってくることは確かである。コンパスの中心が男性か、女性かで詩の内容ががらりと違ってくる。男性を家において外を放浪するのは女性であるという解釈はダンの時代では考えられないというのは伝統的な男性－女性関係を無意識のうちに良しと考える人であろう。時代が15世紀だろうが16世紀であろうが17世紀であろうが、男性のもとを離れて自由に行動するような女性はいたであろう。固定観念にしたがって女性は家、男性は外、という図式を考える危険性は十分にある。女性が外で、男性が家ということもあったであろう。そうすればこの詩の語り手はますます混乱してくる。『英語青年』に掲載された問題提起は語り手が男性か女性かには全く触れていない。また、who の先行詞を thou とした深瀬訳でも語り手が男性か女性かについては何も言っていない。『英語青年』の who の先行詞の問題に対して鈴木聡氏は、先行詞は thou であると述べている<sup>7</sup>。その裏付けは27－28行の“Thy soule the fixt foot, makes no show / To move, but doth, if th'other doe.”であると言っているが、これの説明がない。この行は、中心にいる固定した脚のあなたの魂は動く気配はないが、もう一方の外にいる脚が動けば、固定した脚は動く、と言っているだけで、この2行だけでは先行詞が thou であるとは断定できない。鈴木氏は更に投稿を続け、「当面のところ小生としては who の先行詞は me ではないように思われる(もし me であるとするならば th'other foot とはいったいなにをさしたもののなののでしょうか、……)」と述べているが<sup>8</sup>、この「他の脚」は言う

までもなく旅に出ている人の脚である。鈴木氏の who の先行詞が thou であるという根拠は乏しい。ところで男女の別れを歌った valediction は「別れ」以外に3編あるがその3編とも語り手は男性であることがはっきりしている。また同じような別れを歌った「うた:愛しき人よ」でも語り手は男性である。「唄とソネット」のほとんどすべてが男性の視点から書かれているとことを考えれば、「別れ」の語り手も男性であると考えるのは自然であろう。しかし(また「しかし」であるが)100%そうであるとは断定できない。「別れ」の詩についてもし読み手が詩人の伝記的事実や他の詩を考慮にいれず、この詩だけを取り出して読めば、語り手が男性か女性かは判断に迷うだろう。読み方によって二通りの解釈が可能となってくるからである。ところがこれまでの日本の主な翻訳を見ると、すべてが who の先行詞は me で、語り手を男性と解釈している。松浦嘉一氏は問題の行については「貴女の脚がしっかり固定するなら、わが脚が円を正確に描くことが出来、……」と注をつけていることから明らかなように、中心の固定した脚は女性である<sup>9</sup>。篠田一士他の訳では「おまえは僕にとってそういうものなのだ」とあり<sup>10</sup>、河村錠一郎氏の訳は「きみはほくにとってこうなのだ」となっている<sup>11</sup>。最近では湯浅信之氏の訳は「どうかこの姿勢を守ってくれ。僕は、/ もう一つの脚のように、斜めに走る」である<sup>12</sup>。いずれもが語り手は男性でコンパスの固定した脚は女性である。つまり旅に出る男性が家に留まる女性に別れを告げていると解釈している。とすれば深瀬氏の訳「あなたも、それと同じこと。あなたも、もう一方の足と同じように、からだをななめにして走らなければならないのだ。」<sup>13</sup>は新しい訳で、男性が固定した脚で、円を描くのは女性である。これは斬新な訳であるが、解説では「これ(「別れ」)は作者が、遠い旅に出かけるに際し、別れを悲しむ女(おそらく妻)に向かって、「嘆くなかれ」という「別れの歌」である」と Walton の伝記に従って述べている<sup>14</sup>。この解説によればコンパスの固定した脚はやはり女性で、外で円を描くのは男性となる。これは上記の日本語訳と矛盾した説明で、説明と日本語訳は一致していない。もし深瀬訳が解説通りであれば、「あなたも、もう一方の足と同じように、からだ

をからだをななめにして走らなければならないのだ」は「わたしも、……」としなければならない。ところが深瀬訳の最終2行は「あなたがしっかりして、はじめて、わたしの円は完全になり、始めたところに「わたしは」帰ってくることができるのだ。」となり、円を描くのは「わたし」で、家に戻ってくるのは「わたし」となっている。とすれば深瀬訳は解説とは異なる訳となり、解釈に一貫性を欠いていると言えよう。なぜ深瀬氏は who の先行詞を thou にしたのであろうか。この問題は8, 9連を正しく理解すれば解決する問題である。8, 9連は以下の通りである。

And though it in the centre sit,  
 Yet when the other far doth roam,  
 It leans, and hearkens after it,  
 And grows erect, as that comes home.

Such wilt thou to me, who must  
 Like th'other foot, obliquely run;  
 Thy firmness draws my circle just,  
 And makes me end, where I begun.

外で円を描くのは「わたし」であることは my circle(私の円)からも明らかであり、始めに戻ってくるのも「わたし」である。8連の最初の行の it は「君の固定された脚」であり、the other は外で円を描く人である。他方が遠くをさまよえば、固定された脚は心配して相手の方に傾き、耳を傾け、家に帰ってくると直立する。そして最終連で「あなたはわたしにとってそのようなのだ」と言うが、「そのような」とは固定した中心にいるコンパスの脚のもう一方の脚への気遣いである。who の先行詞を thou とすると「あなたがもう一方の脚のように円を描いて走らねばならない」となる。中心にいれば「走る」必要はない。「走る」必

要があるのは外にいるコンパスの脚である。とすれば who の先行詞は me とするのが妥当であろう。更に言えば「あなたの脚の堅固」は中心にいるコンパスの脚の堅固さである。その堅固さがあれば「わたし」も円を「正しく」描くことになる。外にいる「わたし」が円を描いているのであって、中心にいる「あなた」ではない。中心にいる「あなた」は円を描く必要がない。(コンパスの外の脚だけが円を描くのではなく、中心にいる脚も点を中心に回転していると言うことができるが、「斜めに走る」必要はない。)この最終連からおおよそ who の先行詞の問題は解決がつく。とすれば深瀬訳は解釈の取り違いで、その解説からも明らかのように、間違っただけで訳していることになる。それにもう一つ付け加えるならば、欧米の研究者で「別れ」の33行目の who の先行詞についてはほとんど誰も何とも言っていない。ということは彼らの間では who の先行詞が thou か me かは問うまでもない自明なことなのであろう。つまり who の先行詞が me であることは疑問の余地がないと考えているのである。筆者が「別れ」を扱っているダン研究書を見る限りでは、ほとんどすべてが Walton のダンの伝記で言及されている「別れ」の説明に従って、「別れ」は1611年にダンが Sir Robert Drury と共にフランスに行ったときに妻の Ann にあてて書かれた詩であると解釈している。そしてほとんどすべてが「わたし」は男性で、「あなた」は女性としている。「別れ」についての欧米の研究者は、この詩は旅に出掛ける男性が家に残る女性に向かって書いていると考えているのである。この解釈が圧倒的に多い。

ここまで来ると、本論の問題点は決着がついたように思われる。筆者は欧米の研究者は「ほとんど」と書いたが「ほとんど」ということは例外があることを意味する。実際、「別れ」の語り手が「女性」で、旅に出掛ける女性が家に留まる男性に向かって詩を書いているという解釈もあるのである。それは who の先行詞が thou であることに至る解釈である。次にその解釈を見てみたい。

### 3. 「別れ」の語り手は誰か

上で見たように、筆者にとって who の先行詞は me ととるのが妥当であるように思える。問題は、「わたし」は男性で「あなた」は女性であるのかである。これまでの考察から、「別れ」は Walton の言葉に従ってダンが大陸に行く際に妻にあてて書いたものであると解釈する研究者がほとんどであることがわかった。Walton に従えば語り手の問題は何もない。ところが Walton のダンの伝記は研究者の間では評価が低い。その理由の一つは Walton の伝記には様々な間違いや誤解が多いことである<sup>15</sup>。確かに Walton の言うとおりに、ダンが妻にあてた詩であるとすれば詩はわかりやすい。ところがすでに述べたがこの詩をそれだけを取り出してみると、詩の中に男女の関係を示唆するものは皆無である。語り手の「わたし」は男性なのか、家に留まる「君」は女性なのであるのか、それとも逆に「わたし」は女性で、家に留まる「君」は男性なのか。男性が女性にあてて書いたのか、それとも、女性が男性にあてて書いたのか。この問題を解消してくれるものは何もない。他の「別れ」の唄がすべて男性から女性へ書かれているからこの「別れ」も男性から女性へあてて書かれたとする根拠はない。またダンの『唄とソネット』のほとんどの詩が男性が語り手であることから「別れ」も男性が語り手であると結論づけることはできない。とすれば「別れ」の語り手はどのように解釈したらよいのであろうか。欧米の研究者の間で「別れ」の問題を扱っている研究者はいないのであろうか。筆者が知る限り、この語り手の問題を論じている代表的な論文が Wisam Mansour の “Gender Ambivalence in Donne’s “Valediction: Forbidding Mourning”” である<sup>16</sup>。Mansour がいかなる理由により語り手を女性としているのかを彼の論文から検証を試みたい。果たして Mansour の解釈に妥当性があるのだろうか。

最初に Mansour は、「別れ」を読んでみても「話しかける人」と「話しかけられる人」の性別を決定する詩の言葉からの証拠はないと言う。これは筆者も既に指摘した通りであるが、確かに「別れ」には男性か女性かを示す語はない。詩の

登場人物に性別の役割があると考えるのは「文化的」「解釈上」の問題であり、又、詩についている注で述べられている詩人の意図に基づく Mansour は言う。登場人物に性別を決めつけるのは読み手であり、伝統的な性別の役割を登場人物に与えることはできないという主張である。詩人の注で性別がはっきりすることがあるが、「別れ」の場合、ダンは何も語っていない。従来の「別れ」の登場人物については Walton のダンの伝記からダンが大陸へ行く際に妻にあてた詩と<sup>7</sup>考え、語り手はダン、相手は妻の Ann と考えるのが一般的であった。しかし Mansour は、語り手は女性であると考えて精密に詩を読んでもみると、ダンが女性に対して肯定的な態度を取っていることがわかる、と言う。Mansour の主張を裏付けるのは最初の 1 行目にある。女性の語り手は、家に残る男性は良い人で深刻な危機に際し善人のように振る舞わなければならないと男性に思い起こさせていると Mansour は言うのである。Mansour によれば、有徳の士が穏やかにこの世を去るように、あなた(男性)も二人の別れに際して穏やかに別れなければならない、と女性が男性に諭しているのである。しかし第 1 連は As.....So..... の構文で、有徳の士のように私たちも「やさしく溶けて別れよう」と言っており、この連だけからは語り手が女性であるとは断定できない。Mansour は、徳のある人やその従者のように振る舞うように愛する女性に説得する語り手の男性(と仮定すれば)には何ら正当な理由は見つけられないと言う。この説明には疑問である。なぜかと言えば語り手は単に別れに際してお互いに静かに、穏やかに別れようと言っているだけであり、そこにこそ「正当な理由」があるからである。Mansour は男性だけが穏やかに別れなければならないと言っているが、この詩では男性も女性も穏やかに別れなければならないと言っているのである。それが俗人の別れと異なるところである。別れに際し、女性は男性にめそめそするな、立派な男性のように悠然とした態度を取りなさいと語り手女性は言っているというのが Mansour の解釈である。

9-10 行の解釈に関して Mansour は“Men reckon what it did and meant.”の Men を男性ととっているが、これは単に「人々」であろう。Mansour の解釈では、

男性は地震があると地震がたらす被害を知っている。女性は迫り来る別れを女性らしい細やかな気持ちで男性に準備させている。語り手の女性は、自分は理性のある分別のある女性であると相手の男性を納得させている。月下の気まぐれな女性(月の移動と共に変化する)とは異なるのである。女性は、たくましい、徳のある、理解力のある男性としての役割を男性に信じ込ませ、女性は女性で自分は月ではなく、分別があり、心変わりのしない女性であると考えている。女性は、男性は女性の人生の中心であると男性に思い起こさせている。なぜ女性が男性を中心に置くかといえばそれは男性の「堅固さ、信頼性、性的な力強さ」のためである。中心のコンパスの脚の「直立」には男性の「勃起」の意味があり、中心にいるのは男性であることが示されている。また外にいる女性が描く円は女性の性器を表し、円はたえず女性であるとの西洋文学の伝統的解釈を Mansour は持ち出している。“Thy firmness makes my circle just, / And makes me end where I begun.”では男性に男性の力強さと性的能力を思い起こさせ、女性は男性の女性であり続けることを男性に確約していると Mansour は言う。

ここまで Mansour は詩の語り手は女性、相手が男性、つまり旅に出るのは女性で家に残るのが男性との仮定に立って論を進めてきたが、詩には以下の5の先入観があると言う。

1. 男性は女性のすべての活動の中心にいる。
2. 男性はこの女性放浪者の指導者であり導き手である。
3. 男性的であることは徳、知識、英知、寛容、力強さと結びつけられる。
4. 女性は他者性をはっきりさせている。28-34行で、彼女は自分を“the other”とよんでいる。
5. 女性の虚栄心と性的特質が表面化している。

結果としてダンは、自分を女性の立場に置くことによってまた伝統的な男性



のような言葉で女性を描くことによって因習的な性別の役割を再確立し、最終的には女性に対して敵対感を表している。それは女性が男性を支配することへの恐れによって引き起こされている。上記の1～5までは従来のダン研究者が持っている先入観であると Mansour は考えるが、Mansour は「別れ」の読みから、ダンが女性に対してむしろ肯定的な同情的態度を微妙に抱いていると考える。「別れ」で、ダンが動く女性を示すことによって微妙に女性の男性への忠誠、忠実、献身についての伝統的な考え方を取り消し、固定し同時に動く者として逆説的に見られるのは男性であるという考えを出しているのである。ダンが詩のなかで男性の考え方を示しており、時代の社会的な価値観をひっくり返すことなしには女性を完全に男性と同等な自立した人としては見ることが出来ない。ダンが男性に力強さ、堅固さ、支配力を与えるように女性の語り手に同意させているが、この同意に男性の力強さへの皮肉や嘲笑がないわけではない。男性の力強さは女性を円の軌道に固定させることで威厳を見出ししている。しかし女性が男性に「美德の士」のように振る舞えと言っているのは言われた男性には「美德」がないことを示唆しており、「別れ」の最初の行は男性の特性について疑惑の影を投げかけている。女性の「斜めの行動」がこの疑惑を確実なものとしており、男性優位の基盤を揺るがしそうな問題点を作り出している。

Mansour の論文は以上の通り、語り手を女性とし、相手を男性とする従来の「別れ」解釈とは異なる視点から論を展開している。Mansour の論議には幾分強引なところもあり、全面的には賛同はできない。第一の理由は語り手—女性、相手—男性という論拠のための詩からの引用が少ないことである。例えば1行目の「有徳の士は、穏やかにこの世を去り、…」から Mansour は語り手が女性であると断定しているが、この行だけから果たして語り手が女性であると言うのは幾分性急すぎである。上でも述べたように、ダンは有徳の士のように私たちも静かに別れましょう、と言っているだけで、ここから女性が語り手であるとは言えない。また Mansour が語り手—女性で証拠に持ち出した9—10行に関しても Mansour は Men を男性としているが、これは一般的な人々を指してい

と考えるのが妥当である。女性を語り手とするとどうしてもこの Men を男性としなければならないが、ダンの他の詩でも Men が男性ではなく、ただ単に「人々」を指していることがある。Mansour の詩の「精密な読み」の割には詩からの引用が少なく、説得力に欠けるところがある。Mansour の議論のなかでもっとも疑問に感じられるのは、男性が中心にいることが逆に男性の女性への優位を示しているという点である。男性は中心にしながら外を動く女性を影で操っているのである。女性が男性を家に残し、遠くをさまよう姿は自由、自立、冒険心に満ちた女性の姿を彷彿させるが、そのような自由奔放な女性であっても結局は男性によって支配されるのである。とすれば語り手が女性であるという意味が幾分弱くなる。男性を置いて一人好き勝手に遠く外をさまよう女性はそのさまよいのなかで何を見いだしたのであろうか。男性には左右されない女性の生き方を再確認したのであろうか。中心にいる男性の「徳、知識、英知、力強さ」を女性は認めることによって自らの女性としての弱さを再認識したのであろうか。旅を終わった女性がそのような弱さを見せることはこの詩の意図するところであらうか。もし旅に出掛けるのが女性だとすればむしろ自信満々に旅を終え、家に残った男性を慰めるような形で中心に戻ってくるのがこの詩にはふさわしい。弱々しい、自信に欠けた、疑心に満ちた帰宅ではこの詩の相思相愛の男女にはふさわしくない。魂が一つになっているほど精神的に一体化している二人に迷いがあってはならない。信頼感がお互いにはある。この詩の中では男性が女性より優位にたつとか女性が男性より優位に立つという問題は生じない。「何物かわからないほど/愛によって精錬・純化され」「互いの心に絶対の信頼を寄せている」二人である。とすれば Mansour が、この詩の女性が「男性としての力強さ、堅固さ、支配力」を男性に与えていると言っているが、それは男性の女性への優位を示すことになる。もっとも男性優位論には女性から男性への「皮肉」「からかい」がないわけではないと Mansour は言っているが、愛し合う二人に女性からの男性への「皮肉」「あざけり」を見ることができるのであろうか。この男女間の優劣は二人には存在しないのである。Mansour の議論

はこれまでの「別れ」における語り手は男性であるとの解釈に反論し、語り手は女性であるとの観点から論を展開しているが、やや我田引水の議論になっている。最大の問題点は外をさまよう女性が依然として男性の支配下にあるという点である。男性の支配下にある女性がなぜ自由に男性の元を離れていくことができるのか。それも男性の許可を得ているからだと言えればそれまでだが、それほど単純に考えることができるのであろうか。語り手の女性は男性の浮気があれば彼女も浮気をせず無事男性の下へ戻ってくると言うが、女性は男性の支配下にありながらも性的放縦に身を投げるのであろうか。二人の関係を考えるとこれも疑問である。二人は互いを信頼し合っている。浮気云々は互いに対する背信行為である。語り手を女性とすると様々な問題点が生じてくることは否定できない。「別れ」を語り手を女性とする難点は、詩の言葉は女性が語る言葉としては幾分難解で抽象的であるということである。ダンの『唄とソネット』では女性が語り手であるのが「夜明け」「制限された愛」「自愛」の3編であるが、それらで女性が語る言葉は女性が語るにふさわしい言葉であり、内容となっている。「別れ」の内容は女性が語るには難解な表現となっている。女性だからと言って「別れ」の詩を書く能力はないというのは女性への偏見であり、女性でも「別れ」くらいの詩は書けると言えればそれまでであるが、それにしても女性が表現するには内容が高度であることは確かである。やはり「別れ」は男性が女性にあてて書いたと解釈するのが妥当であろう。それに愛し合う男女は魂が一つになっているというのは他の詩では男性が女性に向かって言っている言葉である。確かに Mansour が言うように「別れ」には語り手が男性か女性かを決定づける言葉はない。これまで欧米の研究者はほとんどが Walton の言葉を鵜呑みにして、語り手は男性、しかもダンとして解釈してきた。筆者もこの解釈には疑問を感じたが、「別れ」を総合的に考慮するとあながち Walton の言葉を却下することはできなくなってくる。Walton の伝記に左右されて「別れ」を読むのが主流であったが、それも理解できないことはない。ダンの詩のなかで愛し合う男女、それも男性の女性への態度はいつも「やさしい」のである。女性へのうら

みつらみ、憎悪を歌った詩もあるが、男性の愛する女性への心情は情愛豊かに歌われている。「別れ」でも詩の全体的なトーンから男性の女性への思いやり、やさしさ、相思相愛の二人の姿が浮かんでくる。詩の中で女性を終始リードしているのはやはり男性なのである。「リード」と言ったがそれには男性の女性への優位感を示唆するものではない。語り手は男性である。とすればこの論文のタイトルにあげた問題は自ずから解決がつく。who の先行詞は me であり、thou を先行詞とした深瀬訳は誤解なのである。

### むすび

ダンの「別れ」の一節の二つの日本語訳から論を展開し、「別れ」ではコンパスの中心にいるのは女性で、女性を離れ遠くをさまようのは男性であるという結論に達した。この結論からまた、who の先行詞の問題も解決した。その際筆者はダンの『唄とソネット』を総合的に考慮に入れ、問題の解決にあたった。「別れ」それだけを読み、また Walton の「別れ」についての言葉がなければ、「別れ」の語り手と聞き手に関してどのように決着をつけるだろうか。語り手が男性で聞き手が女性と解釈する者もいるであろうし、逆に語り手は女性で聞き手は男性であると解釈する者もいるであろう。現代風のフェミニズム的批評からすれば後者の解釈に賛成する人もいるであろう。しかし Mansour の「別れ」論もそうであるが、語り手が女性であるという解釈は「別れ」の詩だけを取りあげ、ダンの『唄とソネット』全体からの解釈とはなっていないという大きな欠点がある。あるいは詩の言葉を無理に解釈する過ちを犯している。たとえば、男性がコンパスの中心にいることの証拠として、遠くにいる女性が家に帰ってくると中心にいる男性は erect するという語がある。これは単にコンパスが「直立する」という意味であるが、それを男性の penis が「勃起する」と解釈し、女性の帰りを待つのは男性であると結論づける。確かに erect には性的な意味もあったが、果たして「別れ」でそのような露骨な意味で erect を解釈してもよいのだろうかと考えるとき、筆者は戸惑いを覚えるのである。同様な性的な解釈を Docherty も

行っている。彼は“Thy firmnes makes my circle just, /And makes me end, where I begunne.(ll.35-36) について firmnes は erect penis であり、この詩の語り手を男性とすれば彼は homosexual であるとさえ言う。更にコンパスの脚は二つとも stiffe から詩に登場する人物は homosexual であるとさえ言う<sup>17</sup>。果たして firmnes や stiffe は penis の「固さ」を示しているのであろうか。Docherty は、35-36行で男性-女性の関係は逆転しているともいう。そして circle は vagina であり、ending は female orgasm となると言う。このような解釈が妥当であるかは筆者には疑問である。筆者が知る限り who の先行詞に言及した唯一の欧米の研究者 Mintz は“Thus“who (in“Such wilt thou be to mee, who must ...obliquely runne”) also seems detached, applicable to either of them grammatically as well as thematically. And which of them is “th'other foot”? と述べ、who の先行詞は thou でも mee でもあると言っている<sup>18</sup>。Mansour、Docherty、Mintz の「別れ」論は従来のダン批評を覆す斬新な論となっているが、その解釈は「別れ」だけに終始し、しかもダンの全体像を無視した解釈となっている。やはりある詩人の詩を論ずる場合には詩人の総合的な観点から論ずる必要があろう。そのような視点から上の最終スタンザを見れば、そこに性的なニュアンスを読みとる必要性はないのである。「別れ」の語り手は男性であり、firmnes は家で男性の帰りを待つ女性の「操の固さ」で十分意味をなすのである<sup>19</sup>。ダンの恋愛詩は女性への説得、愛の立証がその根本を成している。ときどき die のようにダン は 性的な意味を語に含ませることがあるが、真剣な男女の愛を歌う詩にそれは見られない。その意味で「別れ」のなかに性的なニュアンスを読みとるのはダンの詩の全体を見ていない結果としか言いようがない。ダンの「エレジー 16 彼の恋人に」に「男らしい説得力のある言葉」(masculine persuasive force, 14) という表現がある。ダンの『唄とソネット』のすべてはまさにこの「男らしい説得力のある言葉」によって聞き手である女性を口説き、女性との愛を歌い、女性の不安を払拭するのである。「別れ」についても同様である。語り手の男性は「説得力のある言葉」で家に残り、男性の帰りを待つ女性に別れの不安や

二人の別れは別れでないことを様々な類推、比較、コンシートによって証明しているのである。このように考えると深瀬訳は受け入れることができない。その訳は詩の解説との整合性を欠き、単なるミスとしか言いようがない。もし語り手が女性で聞き手が男性という図式を立証する説明があれば深瀬訳も時代を先駆けた解釈になったであろうが、残念ながらその解釈を裏付ける証拠はなく、その解説では逆に語り手が男性で聞き手が女性であるという従来の解釈を踏襲しているのである。「別れ」を「ダン・コンテクスト」のなかで読めば自ずから詩の語り手－聞き手の問題は解決してくる。語り手・男性－聞き手・女性の関係を逆転させようとする解釈は「ダン・コンテクスト」を無視した解釈と言えるだろう。

## 注

- 1 『英語青年』 2001年 8 月 pp.50-51.
- 2 『対訳 ジョン・ダン詩集』（東京：岩波文庫 p. 51）.
- 3 A. J. Smith ed.: *John Donne* (Penguin Books, 1971), p. 406.
- 4 Theodore Redpath: *The Songs and Sonets of John Donne* (Methuen and Co. Ltd, 1956), p 86..
- 5 Patricia C. Pinka: *This Dialogue of One: The Songs and Sonnets of John Donne* (The University of Alabama Press, 1982), p. 141.
- 6 この点に関しては以下の論文を参照されたい。Merrity Y. Hughes, "Kidnapping Donne" in John Roberts ed.: *Essential Articles: for the Study of John Donne's Poetry* (Archon Books, 1975), pp. 37-57.
- 7 『英語青年』2001年10月号 pp. 60-1.
- 8 『英語青年』2001年 12月号、p. 70.
- 9 松浦嘉一：『ダン詩選』（東京：研究社、昭和45年）、p.187.
- 10 篠田一士他訳：『世界名詩集 1 ダン 唄とソネット / ブレーク 経験の歌 天国と地獄の結婚』（東京：平凡社、昭和44年）、p. 82.
- 11 河村錠一郎訳 『エレジー・唄とソネット』（東京：現代思潮社、1970）、p. 155.

- 12 湯浅信之、p. 81. .
- 13 中西信太郎監修 京大英語講座 VI『英詩鑑賞』(大阪：創元社、昭和44年),pp.16-7.
- 14 『英詩鑑賞』、p. 17.
- 15 この点についてはアイザック・ウォルトン：『ジョン・ダン博士の生涯』曾村充利訳(東京：こびあん書房、平成5年)、pp.310-311参照。
- 16 Wisam Mansour, "Gender Ambivalence in Donne's "Valediction : Forbidding Mourning"", *English Language Notes* (June 2005), pp.19-23.
- 17 Thomas Docherty: *John Donne, Undone* (Methuen: London and New York, 1986), pp. 74-75.
- 18 Susannah B. Mintz, "'Forget the Hee and Shee": Gender and Play in John Donne", *Modern Philology*, May 2001, Vol. 98 Issue 4, p. 20.
- 19 John Feccero は、ダンはコンパスの使用で女性の"constancy"と"faith"をほめてい  
ると言っている。Mintz, pp. 25-26 を参照。

## References

- N.J.C.Andreasen: *John Donne Conservative Revolutionary* (Princeton: Princeton University Press, 1967)
- R. C. Bald: *John Donne A Life* (Oxford: At the Clarendon Press, 1970)
- James S. Baumlin: *John Donne and the Rhetorics of Renaissance Discourse* (Columbia and London: University of Missouri Press, 1991)
- John Carey: *John Donne Life, Mind & Art* (London/Boston: Faber and Faber, 1981)
- Clay Hunt: *Donne's Poetry: Essays in Literary Analysis* (New Haven: Yale University Press, 1954)
- Helen Gardner ed.: *John Donne: The Elegies and The Songs and Sonnets* (Oxford: At the Clarendon Press, 1965)
- J. B. Leishman: *The Monarch of Wit: An Analytical and Comparative Study of the*

*Poetry* (London: Hutchinson, 1951)

Robert H. Ray: *A John Donne Companion* (New York & London: Garland Publishing, Inc., 1990)

John T. Shawcross ed.: *The Complete Poetry of John Donne* (Anchor Books, 1967)

Terry G. Sherwood: *Fulfilling the Circle: A Study of John Donne's Thought* (Toronto: University of Toronto Press, 1984)

Judah Stampfer: *John Donne and the Metaphysical Gesture* (Simon and Schuster: Clarion Book, 1970)

Arnold Stein: *John Donne's Lyrics The Eloquence of Action* (Minneapolis: University of Minneapolis, 1965)

James Winny: *A Preface to Donne* rev. ed (Longman: London and New York, 1981)